

4. 金沢大学卒業生における大学教育の評価

(代表) 川端優香里 (文学部人間学科 社会学コース 3年)
池谷 知佳 (文学部人間学科 社会学コース 3年)
濱口紀一郎 (文学部人間学科 社会学コース 3年)
三宅佑香里 (文学部人間学科 社会学コース 3年)

指導教員

溝部 明男 (人間社会環境研究科社会システム専攻 教授)
田邊 浩 (人間社会環境研究科社会システム専攻 助手)

1. 背景と研究目的

国立大学独立行政法人化、18 歳人口の減少など、昨今の大学を取り巻く状況の変化のなかで、大学は変革することを迫られている。金沢大学憲章の中でも、「国立大学法人となるこの機会に「社会のための大学」とは何であるかを改めて問い質さねばならない」と述べられている。この調査の目的は、現代社会で活躍している卒業生から、現在や金沢大学在学中の生活や意識、また、金沢大学に対する意見を得ることである。これによって、金沢大学の教育の成果が実態として把握され、金沢大学の将来構想に多くの有益なヒントが提供されることを期待する。

2. 研究の概要

2005 年 9 月に調査対象者となる金沢大学社会学研究室卒業生(1953 年卒～2005 年卒)に金沢大学人間学科同窓会名簿、社会学研究室同窓会名簿に基づき、今回の卒業生調査の協力の依頼状を出し、同時に現住所の確認を行った。そして 2005 年 10 月には「社会学卒業生の生活と意識に関する調査」と題し、先ほどの現住所の確認等で連絡先が分かった 435 名に調査票冊子を郵送で送付した。その結果、293 通の返送をいただき、回収率は 68.5%であった。調査票の中では、大学・学部選択の理由、学生時代や卒業後の生活・意識、金沢大学卒業の学歴や学校教育に対する誇りや役立ちの程度、金沢大学が今後取り組むべきこと、等の計 40 項目の質問を尋ねた。その後、返送された調査票を入力し、それらの回答と属性(時代・性別・出身地・現職業)との間にどのような関係が見られるのか、等を SPSS という統計ソフトを用い、分析した。

また、今回はプライバシー保護のため、調査票 (A4 版全 22 頁) は無記名で返送してもらい、調査票とは別に返信通知はがきを返送してもらう方式で郵送調査を行い、回答者が特定されることを防いだ。

3. 研究成果と考察

3.1. 年代と出身地の傾向

ここでいう出身地は義務教育終了時の居住地とする。年代の分け方は、おおよそではあるが 1953-75 年卒業が一期校時代、1976-90 年卒業が一期校廃止後かつ城内キャンパス時代、1991-2005 年卒業が角間移転後、となっている。以下、他の項目についてもこの年代の分け方を使用する。

1953-75 年卒業の人たちにおいては、北陸出身者が群を抜いて多い。1976-90 年卒業、また 1991-2005 年卒業の人たちでは、北陸出身者が減少し、他の地方出身者の人(特に中日本出身者)が増加している。

ただ参考として、ここ 5 年間の文学部全体の新入生調査では、北陸三県の出身者は増加傾向にある。対象者の範囲も年代の区切り方も違うので単純な比較はできないが、一応紹介しておく。

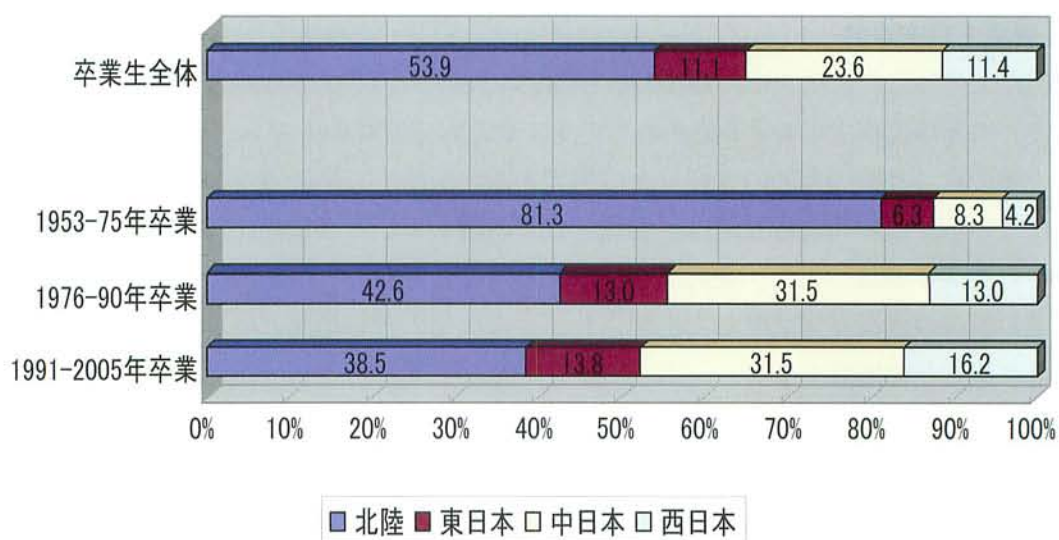


図1 年代と出身地方の傾向

3.2. 金沢大学文学部の志望理由

金沢大学文学部を志望する上で、どのような点を重視したかを尋ねた。

「国立大学であること」を選んだ人が回答者全体の 89.4%と圧倒的に多く、大学を選ぶ上で最も重視されることがわかった。次いで「学びたい学問分野のコースがあること」60.4%、「在学費用が安くすむこと」51.2%、「受験ランキング上の位置」41.6%、と続く。これらが主要な金沢大学の魅力といえる。

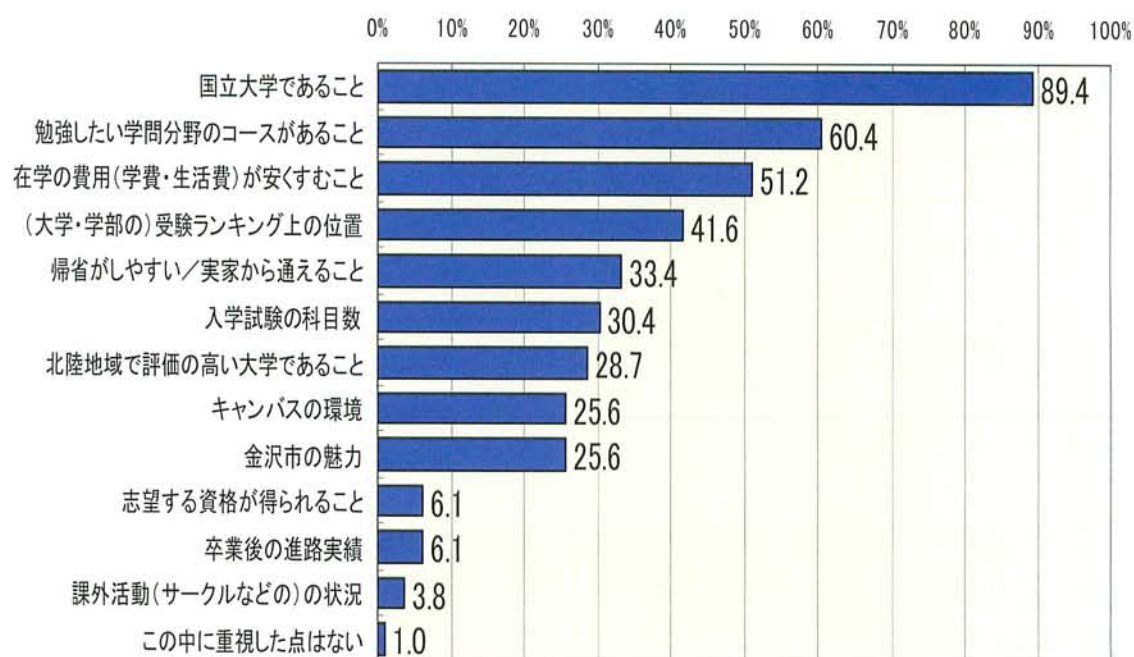


図2 志望の際に重視した点

表1・表2は年代別で回答に有意な差がみられた項目をまとめたものである。「勉強したい学問分野のコースがあること」は年代が若い人ほど多く選択しており、「在学費用が安くすむこと」は年代が高い人ほど多く選択している。

表1 年代別「勉強したい学問分野のコースがあること」を重視したか

	重視した	重視しなかった	合計
1953-75 年卒	34.7 (34)	65.3 (64)	100.0 (98)
1976-90 年卒	64.8 (35)	35.2 (19)	100.0 (54)
1991-2005 年卒	79.5 (105)	20.5 (27)	100.0 (132)
合計	61.3 (174)	38.7 (110)	100.0 (284)

単位：％ カッコ内は人数

$\chi^2=48.032$ ($p<.001$)

表2 年代別「在学の費用(学費・生活費)が安くすむこと」を重視したか

	重視した	重視しなかった	合計
1953-75 年卒	73.5 (72)	26.5 (26)	100.0 (98)
1976-90 年卒	42.6 (23)	57.4 (31)	100.0 (54)
1991-2005 年卒	37.9 (50)	62.1 (82)	100.0 (132)
合計	51.1 (145)	48.9 (139)	100.0 (284)

単位：％ カッコ内は人数

 $\chi^2=30.421$ ($p<.001$)

また「キャンパスの環境」は、角間移転後からは重視する人が有意に少なくなっている。これらの項目のほか、「卒業後の進路実績」「入学試験の科目数」「(大学・学部の)受験ランキング上の位置」「北陸地域で評価の高い大学であること」「金沢市の魅力」で年代別に有意な差がみられた。

3.3. 金沢大学に対する満足度、誇り

金沢大学で過ごしたことに満足しているかという質問に対し、全体で9割以上の人「そう思う」あるいは「ややそう思う」と答えた。年代による答え方の有意な差はみられなかった。

表3 年代別「金沢大学で過ごしたことに満足している」

	そう思う・ ややそう思う	あまりそう思わない・ そう思わない	合計
1953-75 年卒	92.9 (92)	7.1 (7)	100.0 (99)
1976-90 年卒	87.0 (47)	13.0 (7)	100.0 (54)
1991-2005 年卒	91.7 (121)	8.3 (11)	100.0 (132)
合計	91.2 (260)	8.8 (25)	100.0 (285)

単位：％ カッコ内は人数

 $\chi^2=1.575$ ($p>.05$)

また、金沢大学を卒業したことに誇りを持っているかという質問に対しては、全体では約8割の人が「そう思う」あるいは「ややそう思う」と答えた。年代別では、1953-75年卒業の代において「そう思う」「ややそう思う」とした人が有意に多かった。これは、一期校時代の金沢大学の社会的な地位の高さを反映しているといえる。

表4 年代別「金沢大学を卒業したことに誇りを持っている」

	そう思う・ ややそう思う	あまりそう思わない・ そう思わない	合計
1953-75 年卒	88.9 (88)	11.1 (11)	100.0 (99)
1976-90 年卒	70.4 (38)	29.6 (16)	100.0 (54)
1991-2005 年卒	76.5 (101)	23.5 (31)	100.0 (132)
合計	79.6 (227)	20.4 (58)	100.0 (285)

単位：％ カッコ内は人数 $\chi^2=8.882$ ($p<.05$)

満足度・誇りともにほとんどの人が肯定的な回答をしており、卒業生は金沢大学に対してよいイメージを持ち続けているといえる。

3.4. 金沢大学が取り組むべきこと

金沢大学がこれからどのようなことの充実や改善に取り組むべきかを尋ねた。「専門教育」を選んだ人が特に多く、学生が専門分野の力を身に付けることができるような知的環境の整備が求められている。「実践的な知識の育成」「地域貢献」なども多くの人から選ばれた。全体的に専門的・実践的教育の充実や周囲との連携にかかわる項目が上位に来ている。

年代別では、1976-90年卒業の人は、その前後の年代の人に比べ「仕事に役立つ実践的な知識の育成」と「産業界との協力」を選ぶ率が有意に低かった。

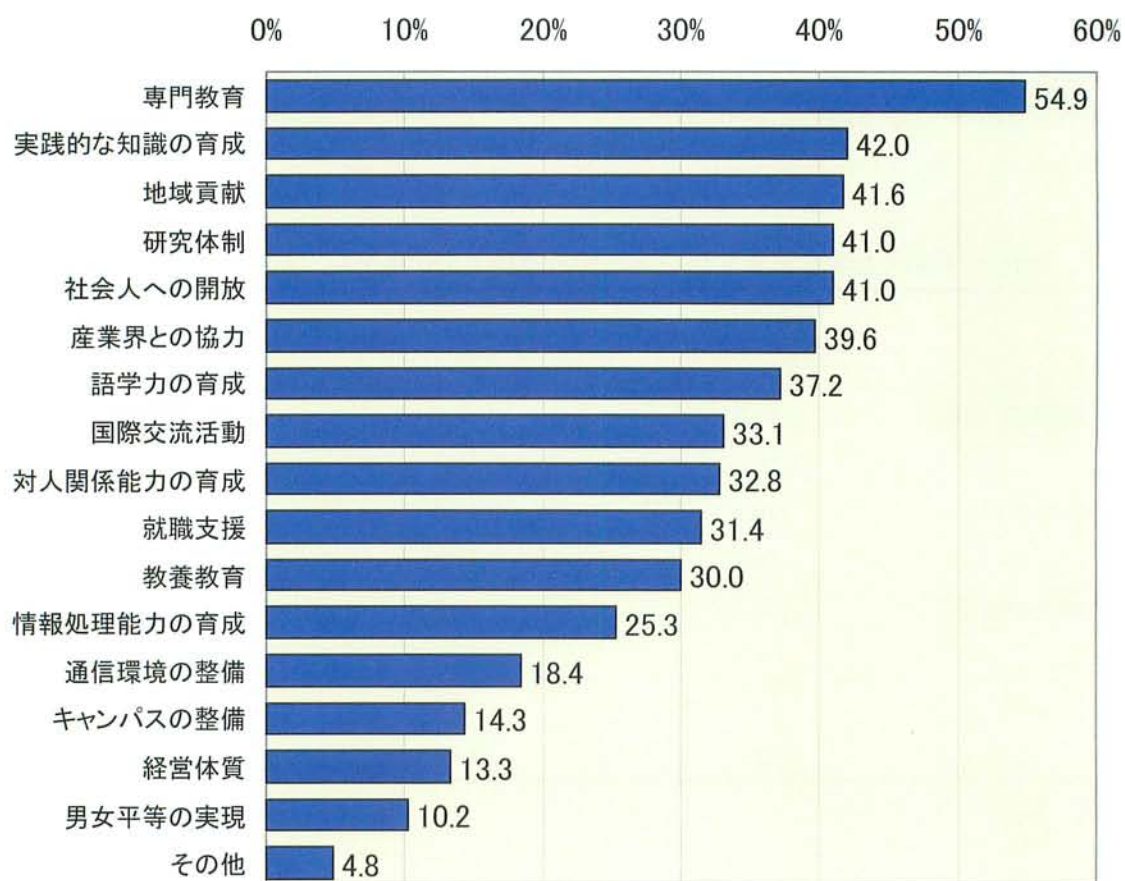


図5 金沢大学が取り組むべきこと

4. 結論

今回の調査では、満足度や誇りについて肯定的な回答が多かったことから、多くの卒業生が金沢大学に対して高い評価をしているといえる。高い回収率が得られたことからそれがわかる。このことは金沢大学にとっても、望ましい結果であるといえる。

今回の調査は社会学研究室卒業生限定で行われており、大学全体の傾向とは異なるかもしれない。しかし、今後、それぞれの学部・学科ごとに卒業生調査がなされれば、興味深い比較を行うことができるだろう。

参考文献

本田由紀 2005 『若者と仕事』 東京大学出版会

川端亮・吉川徹編 2003 『2002年大阪大学人間科学部卒業生調査報告書』 大阪大学人間科学部卒業生調査プロジェクト